



英語文化エッセイ  
Essays on English Studies  
日本英語文化学会

日本学術会議協力学術研究団体

# 英語文化エッセイ

No. 3

20 November 2025





研究ノート

- Tekka Chang, Professional Teacher Development on a Tight Budget . . . . . 2



- 須永 隆広：我が国におけるエンプソンの活動……………4



- 高橋 強：ベースボールをテーマとしたアメリカ文学の作家たち ······ 6



- Noboru Fukushima, *Othello* and *Desdemona* from the Viewpoint of Oxymoron

• • • • • • • • • • • • • • • 12



- 清水 純子：映画『アプレンティス ドナルド・特朗普の創り方』—アメリカ大統領ドナルド・特朗普の青年期を見る……………15



## Professional Teacher Development on a Tight Budget

Tekka Chang

With the abolishment of teacher license renewal, it has become even more important to develop the skills of English teachers throughout Japan. While it is great that some boards of educations (BOEs), such as the one in Tokyo, can invest a lot of money in training teachers overseas, what about the BOEs with smaller budgets? A constant strain

on each BOE's budget makes it difficult for them to invest in its teachers.

One model that came to my mind was the TEAMUP program administered by the University of Minnesota. A two-year project was set up to train 28 teachers from 4 schools when there were not enough ESL teachers for the incoming immigrant children. A TESOL library was set up at each school and teachers received the support of each school so they could go to the monthly training sessions without worrying about their own classes. Instead of having general workshops that were not seen as successful, each teacher created a personalized two-year training plan and could also receive advice from their professors via email or scheduled meetings. To apply this concept for Japan, I thought that each BOE could ask a local university in their prefecture for help.

However, university professors are busy people with their own research and may not be able to help. An alternative idea is to use resources from the web along with technology. For example, the University of Texas in Austin (<https://coerll.utexas.edu/methods/>) has a training site for English teachers where they can study on their own. Each lesson has review questions and a reflection discussion question. English teachers in each BOE could set up a Google Classroom and study on their own and complete discussion questions online. For the teachers with more support from their BOE, they can have monthly meetings via Zoom and discuss questions remotely from their schools or homes.

For teachers that want to study further, a special interest group could be set up. TEFLIN, in Indonesia, has a collection of TESOL books created by top scholars in PDF format that is available for free. (<https://teflin.org/book-publications/>) There are books written on topics such as Instructed SLA, Pragmatics, and Cooperative Learning and each book is written in an easily accessible language for non-native speakers of English. Teachers could create a forum for each discussion question at the end of each chapter and discuss the content online, or via Zoom or Google Meet. For some of the meetings, perhaps a teacher in the BOE who specializes on the topic could lead the discussion. In any case, the only cost is the time spent by each teacher and professional development can be conducted at little or no cost. I am sure that there are many free resources such as online MOOCs created by different universities that can be used as well. Thanks to the spread of technology at the workplace, teachers are now able to get training, despite their busy schedules. Let us hope that each BOE will accept this kind of training as part of the professional development of English teachers throughout Japan so we can be better prepared to help our students improve their English.

#### Reference:

Walker, C. and Edstam, T.S. (2013), Staff Development While You Teach: Collaborating to

## 研究ノート

### 我が国におけるエンプソンの活動

須永 隆広

ウィリアム・エンプソン(William Empson 1906–84)は、我が国において一般的に批評家および詩人として紹介されることが多いが、詩人としてはあまり知られていないと思われる。それは、詩人としての活動期間の短さや批評活動を行う前に詩を執筆していたことに加えて、彼の詩が難解であるということに起因していると思われる。ただそれ以上に、日本で教鞭をとっていたことや、「Basic English」に関心を持っていたことは知られていないのと思われる。当時のエンプソンは、世界情勢が不安定な1930年代に日本および中国に赴任しており、我が国には、1931年から1934年の約3年間、東京文理科大学(現在の筑波大学)において、英文学科教授として招かれたのである。その他、東京帝国大学(現在の東京大学)でも英文学を教える一方、滞在中に、*Some Versions of Pastoral*(1935)や*The Structure of Complex Words*(1951)に組み込まれる論文も発表したのである。これらの著書は、第一作の*Seven Types of Ambiguity*(1930)とあわせて前期のエンプソンの特徴である‘linguistic analyses’の側面から執筆された著書である。

その後、彼は中国へと渡り、1937年から1938年は北京大学で、1938年から1939年は南西連合大学で教鞭をとったのである。当時は、日中戦争の時期であり、疎開しながらテキストも無い中で暗記を頼りに教鞭をとっていたが、戦争が激化してからは身の危険を感じてイギリスへ帰国した。ただ、第二次世界大戦終結後、再び中国へ赴き、1947年から1952年の間、北京大学に復帰して教鞭をとったのである。

エンプソンが我が国に滞在していた期間は、中国に滞在していた期間と比べると短いが、福原麟太郎は、ローマ・ジル(Roma Gill 1934–2001)の編集した“William Empson”に‘Mr. William Empson in Japan’という論文を寄稿しており、我が国でのエンプソンの活動を伺い知ることができる。それによると、エンプソンは市河三喜および福原麟太郎の要請により、ピーター・クエネル(Peter Quennell 1905–93)の後任として我が国に赴任したが、それを推したのが彼の師であるI.A.リチャーズ(Ivor Armstrong Richards 1893–1979)であった。I.A.リチャーズはエンプソンに非英語圏の国で英語を教えることの重要性を執拗に教示したようであるが、それは‘Basic English’の提唱者の一人として、エンプソンに‘Basic English’の講義を期待したためかもしれない。他方で、ジョン・ハッフェンデン(John Haffenden 1945–)によれば、エンプソンの母親は、彼が日本へ行くことにあまり好意的でなかったようであ

る。もっとも、母親の立場からすれば、まだ20代の息子が、第二次世界大戦へと向かう当時の社会情勢を背景に、イギリスとは敵国関係であり、かつ遠く離れた国に赴くことに不安を感じ取っていたためかもしれない。しかしながら、母親の気持ちとは反対に、エンプソンは日本行きを決断し、既述のように我が国で教授の職務に就いたのである。ちなみに、福原麟太郎は、東京文理科大学および東京帝国大学において、エンプソンが担当した一週間の講義科目についても述べている。それによると、英文学史(4時間)、エリザベス朝演劇の劇作家(2時間)、17世紀英詩(2時間)、英文学講読(2時間)、および、エッセイ・ライティング(2時間)を担当していたようである。そのほか、軽井沢のサマーセミナーなどにも参加しており、学生とのコミュニケーションも積極的にとっていたように思える。このように、多くの講義を受け持っていた一方で、母親の不安は的中しており、日本での大地震の経験、日本人女性との恋愛、および戦争への不安を題材とした詩、「Aubade」には、エンプソンが感じていた避けることのできない不安が読み取れる。その他、ハッフェンデンによると、エンプソンの教員生活は必ずしも快適なものではなく、我が国の大学の空気にはあまり馴染めなかつたようである。そのひとつの原因是、エンプソンと大学側の「Basic English」に対する相違かも知れない。たとえば、エンプソンの講義は相当難しかつたようで、彼の講義中、学生達は終始沈黙していたため、講義内容を全て板書したのである。そのため、講義が終わる頃には、エンプソンは常にチョークの粉を身にまとっていたが、学生達の中には板書された英語を一字一句、丹念にノートに取っていた者もいたという。このようにチョークまみれのエンプソンと丹念にノートを取る学生との間には、ある種のコミュニケーションが存在していただろう。実際、エンプソンの講義を受けていた小川和夫は「いかなる学生に対しても一途な気持ちで教えねばならぬということをエンプソンから教わった気がする。」と述べたように、学生達のために「Basic English」の必要性と重要性を大学側に力説したところにエンプソンの人間性が現れている。しかしながら、結局、大学側はエンプソンの意見を受け入れず、「Basic English」の必要性と重要性を感じていたエンプソンにとっては非常にもどかしい状況であったに違いない。

さらに、迫りくるファシズムの嵐の中で、文部省(現在の文部科学省)による大学の干渉も厳しく、エンプソンのような自由思想の持ち主による学生指導は何かと苦情の対象になってしまったのである。このようなことにより、彼は我が国に対して失望感を持ったに違いない。1934年にエンプソンは我が国を離れた後、中国へ渡ったが、その際も我が国に対して行なったように「Basic English」の必要性と重要性を力説した。その甲斐あって、中国ではエンプソンの提案が受け入れたのである。このことが起因しているのかどうか定かではないが、エンプソンが中国に長期間滞在していたという事

実を考えれば、その可能性は否めないだろう。我々が、エンプソンという批評家を知り得たのは、おそらく、アメリカのニュー・クリティックへ多大な影響を与えた人物として、ニュー・クリティシズムという分析手法を通して間接的に認識したのではないだろうか。もし、当時の我が国がエンプソンの提案を受け入れ、「Basic English」を導入していたら、より親密な関係が築け、直接、彼から分析手法についての濃密な教授がなされていたかもしれない。少なくとも、彼の名は今以上に我が国において認知されていたに違いない。

## 研究ノート

### ベースボールをテーマとしたアメリカ文学の作家たち

高橋 強

#### 1. はじめに

現在、大谷翔平選手をはじめ多数の日本人メジャーリーガー達がアメリカという異国 の地で鎧を削り大活躍している。過去において日本文学でも野球を扱った数多くの作品が発表されている。同様にアメリカ文学においてもやはり国民的娯楽(national pastime)といわれるベースボールを扱った作品は枚挙に暇がないほど多く発表されている。今回のエッセイでは、特に人気の高い作品を取り上げ考察する。筆者が取り上げる作品に一貫して多大な影響を与えていたのが、いわゆるブラック・ソックス事件というアメリカ大リーグ史上最悪のスキャンダルであり八百長事件でもある。作家たちはこの八百長賭博事件を様々な角度からアメリカ社会を風刺するという筆致で様々な登場人物を通して見事にその作品の中に投影している。以下にその代表作について比較検討してみる。

#### 2. バーナード・マラマッド (Bernard Malamud) 「ナチュラル」(Natural,1952)

この小説は、大リーグ史上最も大きなスキャンダルともいえる 1919 年に起きたブラック・ソックス事件を題材としたもので、ストーリーをシューレス・ジョー・ジャクソンというスキャンダルの首謀者に祭り上げられ、濡れ衣を着せられた人物と主人公であるロイ・ハバスを重ね合わせることで如何に史上最大の汚点ともいるべきこの事件を強調した物語である。また映画化されたことで再びこの事件をアメリカ社会の腐敗や善惡の判断について問題提起し、純粋無垢なシューレス・ジョー・ジャクソンの人間性とその人となりを再度この作品と映画を通じ諸悪の根源について彷彿させている。小説では 34 歳のルーキーであるロイ・ハバスは当時、お荷物球団であったニューヨーク・ナイツに突如として現れヒットを量産し、押しも押されぬ活躍を見せる。しかし魔の手が忍び寄りハバスは野球賭博の罠にはめられてしまう。のちにこの小説はロバート・レッ

ドフォード主演の「ナチュラル」として映画化され全米で一世風靡した映画でもある。映画では最終回に三振をして大金を得るという小説とは裏腹に、特大ホームランを打ち照明塔を破壊し、照明塔が稻妻のごとく次々と引火している中、ロイを演じるロバート・レッドフォードがゆっくりとベースを一周するという結末で終わる。一方、小説では故意に三振をして八百長に加担することで結末を迎えるという、裏社会の闇に陥れられた人物像が描かれており、悲劇的な結末を迎える。小説とは違い、映画ではハッピーエンディングで終わっており、映画と小説では全く異なったエンディングを見せている。

さらにこの小説は、真野明裕の手法により邦題が変更されており、『奇跡のルーキー』という題名でのハヤカワ文庫から翻訳版が出版されている。この翻訳本のなかで、W.P.キンセラの代表作「シューレス・ジョー」に登場する少年とシューレス・ジョー・ジャクソンとのやりとりを想起させる少年とロイ・ハブスの会話が描かれている。やり取りは以下の通りである。

「一人の少年がロイに新聞を突き付けた。ロイはいらんと言おうとしたが、声が出なかった。大見出しが派手に目を引いた。」「ハブスに八百長の疑い」（中略）  
他に野球連盟コミッショナーの声明も乗っていた。

「伝え聞くところが事実であれば、ロイ・ハブスは野球機構ではもはやこれまでである。彼は球界から追放され、彼の残したすべての記録は永久に破棄されることになろう。」ロイは新聞をその子に返した、「うそだと言ってよ、ロイ」ロイは、少年の目をじっと見ると、うそだと言いたいところだったが、言えず、両手で顔をおおって、さめざめと痛恨の涙にくれた。」（『奇跡のルーキー』真野明裕訳、ハヤカワ文庫）

このように一貫してブラック・ソックス事件を引き合いに出していることは特筆すべきことであり、アメリカ社会の金銭まみれと利権を貪る社会構造をこの小説を通して風刺している。

### 3. W.P.キンセラ(William Patrick Kinsella)「シューレス・ジョー」(Shoeless Joe, 1982)

この小説のなかで、当時の名選手「シューレス・ジョー・ジャクソン」を半世紀以上過ぎた 1982 年に再び主役の登場人物として登場させ物語は展開される。事の顛末をここで再度確認することとする。時は 1919 年のシカゴ・ホワイトソックスとシンシナティ・レッズとのワールドシリーズで事件は起きたのである。ホワイトソックスの名選手であり、俊足好打のシューレス・ジョー・ジャクソンを含む 8 人の選手が故意に八百長を仕掛け、前評判では断然優勢であったホワイトソックスを敗戦へと追いやるという前代未聞の事件が起きた。しかし物語は続くのである。8 人全員が有罪を認めたものの陳述書がどこかへ消えてしまったため、全員無罪放免となるという実に不可解な判決が言い渡される。これがいわゆる後世にまで語り継がれているブラック・ソックス事件である。このシューレスというニックネームはマイナーリーグ時代に裸足でプレーしたことから名づけられたものであり、家庭が貧しかったのでベースボールで一旗揚げてや

ろうと頑張った選手であるが、純粋無垢で野球以外のことは何も知らず、このようなスキャンダルに巻き込まれてしまいアメリカンドリームが水泡に帰してしまったというつらい経験をもつ選手でもある。1920年年のシカゴ・ヘラルド&エグザミナー紙に取り上げられた少年の次の言葉は、アメリカ人の心の中に今でもやり場のない怒りと悲惨な叫びとして焼きついているのである。その言葉のやり取りは以下の通りである。

少年「嘘だと言ってよ、ジョー、嘘だと言って」

シューレス・ジョー・ジャクソン「いや、嘘じゃないんだ、坊や」「僕は嘘だとおもっていたんだけど」

シューレス・ジョー・ジャクソンは南部諸州の一つであるサウスカロライナの出身で、世間知らずで純粋にベースボールだけを楽しんできた人物で野球賭博の様な八百長とは全く無縁で金銭感覚どころか子供でも分かるような善悪の区別すらわからない人物であり、いつのまにか事件の首謀者へと祭り上げられたのである。この純粋無垢な田舎者で粗野で野球馬鹿ともいえる彼は、のちにスコット・F・フィッツゼラルドの『華麗なるギャツビー』(1925)という小説の中での登場人物で中西部出身の田舎者であったギャツビーやニックとその人物像を被らせているのである。またこの小説の中ではブラックソックス・スキャンダルの仕掛け人ともいわれ、何ら罰せられることなくニューヨークにて我が物顔で悠々自適に暮らしているマイヤー・ウルフシェイムも登場させるというベースボールに関連した一節も述べられている。「シューレス・ジョー」及び『華麗なるギャツビー』というアメリカを代表する2大小説の中で、これらの登場人物を素晴らしい筆致で描写することで純粋無垢な人物とアメリカ東部社会の腐敗を見事に描写している。

#### 4. 「天然芝の喜び」(*The Thrill of the Grass*)とアイオワ野球連盟」(*The IOWA Baseball Confederacy, 1986*)

作家であるW.P.キンセラは、ベースボールは太陽の下天然芝の上で行うべきであるという独自のベースボール観を持っており、アイオワ大学で創作を学んだことをきっかけとして「天然芝の喜び」という短編小説のなかで野球場の芝生の匂いを大切にし、球場に映える芝生の美しさを重視している。次の文章にその球場の芝生の素晴らしさをみてとることができる。

「ぞろぞろとスタジアムに入ってきて、我々が生み出した奇跡を発見したとき、選手たちは何を思うのだろう？天然芝の歓びが鼻孔にまで達したとき、古手の選手たちはポニーのように高々と顔を挙げ、ユニホームに着替えながら、子どもの頃のみずみずしい外野に寝転がったことを、おでこに充てられた母親の手のようなひんやりとした芝の感覚を思い出すだろう。」（「天然芝の喜び」『野球引込線』永井淳訳、文芸春秋）

この一節は、キンセラの代表作である「シューレス・ジョー」の中でもジョー・ジャクソンの台詞にヒントを得た一節である。この台詞は次の通りである。

「俺も球場の匂いを鼻に感じ、ひんやりした芝の感触を足に感じて夜中に目を覚ましたもんだった。あのぞくぞくするような芝の感触・・・・・・」といった具合に球場の緑あふれる芝生に言及している行である。さらに次のようにも描いている。

「我々はスタジアムにばらまかれたポップコーンのようにそれぞれの席にばらばらに座って、出口へ向かう途中で顔を合わせるときにうなずきあい、初めて子供が生まれたばかりの父親のように、誇らしげに秘密の笑みを交わすだろう。」（「天然芝の喜び」『野球引き込み線』『アイオワ野球連盟』永井淳訳、文芸春秋）

この最後の言葉にキンセラらしいベースボールの原点を見て取ることが出来る。つまり本来ベースボールとは人工芝の野球場ではなく芝生が敷き詰められ、太陽にてらされ、芝生がまばゆいばかりの光に照らされ、謙虚さを保ち誠実に、しかも忠実にベースボールというスポーツに取り組むことが本来の姿であり、決してブラック・ソックス事件のような八百長賭博と金銭にまみれた人間の悪の側面などという汚れた行為をしてはいけないのであり、子供から大人まで誰でも楽しく球場に足を運び、綺麗な芝生の上でプレーする選手を見て、打って、走って、取って、投げてという原点回帰の喜びを再認識することこそが国民的娯楽と言われる所以であり、それはあたかもまるでファンタジーへ誘うかのようである。

また彼の短編集である「マイ・フィールド・オブ・ドリームス イチローとアメリカの物語」（2002年、井口優子訳、講談社）でキンセラは当時活躍していた日本人大リーガーである野茂英雄とイチローについて次のように述べて賛辞を贈っている。「野茂英雄やイチローに好感を持つのはその慎み深い態度からだ。偉業を成し遂げてもそれを我が物顔に誇示することなく、常に謙虚さを失わない姿勢は素晴らしい。」と述べており、ここにキンセラの「原点回帰とベースボールに真摯に向かい、謙虚さを持ちプレーに常に忠実であれ」という彼の野球観を見ることが出来る。

## 5. 「フィールド・オブ・ドリームス」（*Field of Dreams*）

この映画は、1989年公開のアメリカ合衆国の映画である。製作会社はユニバーサル・ピクチャーズで、ウイリアム・パトリック・キンセラの小説『シューレス・ジョー（英語版）』を原作にフィル・アルデン・ロビンソンが監督と脚色を兼任して、ベースボールを題材に、1960年代をキーワードとして夢や希望、家族の絆といった、アメリカで讃えられる美德を描き上げたファンタジー映画である。そ映画の内容は、レイの幼い娘カリンは夕闇の中、野球場に人影を見つけた。それは1919年に無実の罪（ブラックソックス事件）で球界を永久追放され、失意のうちに生涯を終えたはずの“シューレス”・ジョー・ジャクソンだった。彼とチームメイトたちは野球場で数十年ぶりの野球を楽しむが、その姿はレイ一家にしか見ることができない。そしてこの映画の親子のキャッチ

ボールのシーン最後の場面にある親子のキャッチボールのシーンが忘れられないほど涙を誘うのである。ここに忘れ去られつつある親子の絆の大切さを改めて感じさせられる。レイは家族を養うために、自分の夢を犠牲にした父親に反抗し、子供の頃に親の苦労など分からずに、反抗期に父親を罵ったことを思い出している。早く亡くした父に自分の反省と謝罪を伝えることはできないが、この映画を観て親子の絆のありがたみを思い起こさせるものである。

また、“If you build it, he will come.”という天の言葉が聞こえ、レイがこの声に導かれ、一見無謀とも思えるように、アイオワの畑の中に野球場を作り、父親との絆や過去に浮かばれなかつた野球選手やベースボールを心から愛しスキャンダルにまみれて球界から追放されたシューレス・ジョー・ジャクソンが登場し夢の中でベースボールを楽しむ姿は、アメリカ人ならびに我々日本人にとってもベースボールの奥深さや心の故郷ともいべき安らぎを与えてくれるものであり、ファンタジーと現実が織りなす素晴らしい作品として我々に訴えかけてくれているまさに心に響く映画なのである。

#### 6. ボブ・グリーン「ルイビル・スラッガー」『チーズバーガーズ①』(Louisville Slugger)(Cheeseburgers①,1993)

ルイビル・スラッガーとは今も昔もアメリカの子供から大人まで、野球のバットと言えばルイビル・スラッガーのバットのことである。ケンタッキー州ルイビルに本社を構える一大バット工場のことでもある。作家ボブ・グリーンは「ルイビル・スラッガー」という小説の中で野球用品として誰もが憧れるルイビル・スラッガーというバットについて次のように述べている。

「広場や校庭で大リーグのスターのサイン入りルイビル・スラッガーを握りしめて大きくなった少年はみな、自分のネーム入りルイビル・スラッガーを持つと考えただけで、ほとんどめまいを覚えるほどなのだ。（中略）アメリカの男たちにとって、ルイビル・スラッガーはまさにお守り、筆舌に尽くしがたい象徴的意味と重要性を持った宝ものなのである。（中略）そしてもう一枚はテッド・ウィリアムズがルイビル・スラッガーのクスしている写真だ。これまでその友人に、どうしてそんな写真を置いておくのか、と聞いた人間はひとりもいない。いうまでもなく、説明などしなくとも、その意味はわかりきっているのである。」（「ルイビル・スラッガー」『チーズバーガーズ①』井上一馬訳、文春文庫）

このようにボブ・グリーンという現代の作家でさえ、ベースボールを扱った短編小説を発表しており、過去から現代へとベースボールの持つ子供のころに経験したワクワク感と大人になっても心の底から湧き上がる童心に帰ったような子供心の熱い思いを描いている。

#### 7. フィリップ・ロス「素晴らしいアメリカ野球」(The Great American Novel, 2016)

この小説は、はまるで喜劇を見ているかのように物語が展開する。邦題で「すばらしい」という訳が付いているが、その内容はというと、素晴らしいというよりは全く素晴らしい野球小説である。これはアメリカ大リーグのナショナルリーグともアメリカンリーグとも違う第3のリーグともいわれる「愛国リーグ」を題材に物語が展開されている。ロスはこのリーグに壮大なロマンとスペクタクルを野球という観点から見事な筆致で描写している。登場人物も野球選手らしからぬ曲者ばかりを登場させ、野球の一大サーカスともいえるような選手に焦点をあてて描いている。登場人物はというと小さな大投手、52歳のルーキー、片足のキャッチャーなど枚挙にいとまがない。これらの選手たちをブラックともいえるユーモアを込めて野球を題材にして、1960年代当時のアメリカ政治や文化を風刺しており、ケネディー大統領暗殺からベトナム戦争に至るまで人権問題や暴力そして閉塞感と空虚さに反発した若ものたち、いわゆるビート族という自由な生き方を模索する者たちを礼賛するアメリカ社会などを風刺することで、サーカス集団ともいべき野球チームを通じてアメリカ社会への怒りをぶちまけた小説となっている。このようにロスにとっての野球は当時的一大国民の娯楽であった野球を斜に構える形で風刺した一大長編小説なのである。今までベースボールとは素晴らしいものであるという固定概念を破ったという意味ではベースボールを通じて社会の負の側面を書いたこの小説は読者の興味を引くものとなっている。

## 8.まとめ

今回のエッセイではベースボールに焦点を当て、新旧のアメリカ文学を代表する作家の小説を通して、ベースボールの観点から鋭く社会を風刺し、またベースボールの持つ素晴らしさについて述べてきた。今回のテーマとなっているブラック・ソックス事件がアメリカ文学の様々な小説に登場し、その影響力は計り知れないものがある。汚れたものを嫌い、純粹で無垢でひたすらベースボールに取り組むことこそがアメリカ人の心を揺さぶり、そのハートをしっかりと掴み、事の本質とは何なのかをアメリカ社会にもう一度問い合わせことで、本来あるべき姿をベースボールに投影している。アメリカの文化と伝統そして人種問題を国民的娯楽であるベースボールを通じて、あらゆる年代において礼賛と風刺を今回取り上げた小説の中で、登場人物を変えながら、見事な筆致で描いていることは称賛に値する。この様にベースボールの持つ素晴らしさは今後も次の世代へと受け継がれ、また様々な小説に登場してくるであろう。次はどのようなベースボール小説が世の中に登場するのか楽しみである。

## 参考文献

Kinsella, W.P. *Shoeless Joe*, Houghton Mifflin ,1982

————『シューレス・ジョー（英語版）』永井淳訳,文藝春秋、1985年

————『「マイ・フィールド・オブ・ドリームス イチローとアメリカの物語」

- 井口 優子訳、講談社 2002 年
- 『奇跡のルーキー』真野明裕訳、ハヤカワ文庫、1984 年
- 『天然芝の喜び (The Thrill of the Grass) 』永井淳訳、文芸春秋、1987 年
- 『アイオワ野球連盟 (The IOWA Baseball Confederacy) 』 永井淳訳、文芸春秋、1987 年
- Malamud, Bernard. *Natural*, Harcourt Brace and Company, 1952
- Robinson,Phil Alden. *Field of Dreams*, Universal Pictures, 1989
- 『チーズバーガーズ①(Cheeseburgers①)』井上 一馬訳 文春文庫、1993 年
- フィリップ・ロス「素晴らしいアメリカ野球」(*The Great American Novel*) 中野 好夫訳、新潮文庫、2016 年
- ボブ・グリーン『ルイビル・スラッガー(Louisville Slugger)』1993 井上 一馬訳 文春文庫、1993 年

### 研究ノート

#### *Othello and Desdemona from the Viewpoint of Oxymoron*

Noboru Fukushima

In Shakespeare's *Othello*, the combination of contradictory words in figurative language is known as an oxymoron. By juxtaposing opposing concepts, this rhetorical device highlights the play's themes, such as love and hate, good and evil, and the destructive nature of jealousy. The following example illustrates this: Iago tells Roderigo that honest fools who work like donkeys for their masters all their lives, only to be fired when they are old and worn out, can go to hell.

Whip me such honest knave. (1.1.49)

“Me” is an ethical dative and “honest” means honourable. An “honest knave” is potentially an oxymoron. This is because in early modern English, “knave” meant a dishonest and untrustworthy person—a swindler or a scoundrel. Since honesty implies moral integrity and sincerity, it is an oxymoron. Catholics hold a more positive view of human nature. They believe the human will is flawed, but not utterly corrupted. Protestants believe humans are fundamentally evil. The optimistic view of human nature in Shakespearean

plays resonates with Catholicism.

Moving to the next example. Iago pretends to be faithful to Cassio, deceives him, and then leaves him alone. When the devil tempts a man to commit the worst sins, he first appears as an angel. “As I do now” (2.3.320), he says to himself:

Divinity of hell!  
When devils will the blackest sins put on,  
... (2.3.317-318)

Iago cries out, “Divinity of hell!” This is an oxymoron—a contradictory expression combining the sacred (divinity) with the evil (hell). He marvels at how evil can disguise itself as good, how the devil wears the mask of virtue to tempt people. Here, he is plotting to exploit Desdemona’s goodness to bring about her ruin. As Norman Sanders points out in the New Cambridge edition of *Othello*, “Divinity of hell! refers to the Theology of the Devil. The allusion is to Satan’s citation of scripture in the temptation of Christ in Matt. 4.6.” (136).

Let’s move on to the next example. Othello, deceived by Iago, curses Desdemona as a whore. She has no idea what crime she has committed:

What ignorant sin have I committed? (4.2.69)

“Ignorant sin” is truly an oxymoron. Desdemona uses this phrase when asking Othello what “ignorant sin” she has committed, emphasizing her confusion and innocence in the face of the accusation against her. This phrase combines the concept of “sin,” implying knowledge and intent, with the concept of “ignorance,” suggesting a lack of awareness or understanding. This contrast heightens Desdemona’s bewilderment at being accused of a sin she did not know she had committed, highlighting the tragic misunderstanding that fuels the play’s conflict. According to Norman Sanders, “ignorant” means “unknowing, innocent” (181).

In Toni Morrison’s *Desdemona*, an adaptation of *Othello*, the oxymoron is rarely stated explicitly as a single phrase. Rather, the play’s overall concept unfolds around the tension between Desdemona’s pure, idealized image and the harsh realities of race and power within the play. Morrison reconstructs Desdemona, moving beyond Shakespeare’s tragic

characterization to explore the complexity of her experience as a white woman marrying a black man in a racially segregated society. There is a contradiction in the clash between Shakespeare's romantic, "angelic" Desdemona and Morrison's more nuanced, complex portrayal. Here is one of the few examples of oxymoron: Desdemona's soul exists "between being killed and being un-dead; between life on earth and life beyond it", never to perish. In "life beyond it, I join the women in the water and walk with them in the dark light:

I join the underwater women; stroll with them in dark light, listen to their music in the spangled deep. (14)

"Dark light" is an oxymoron combining two contradictory or opposing concepts, blending two mutually exclusive qualities. 'Dark' signifies the absence of light, while "light" denotes illumination or a light source. Combining these creates a contradictory image that defies logical explanation yet evokes a complex emotional or symbolic atmosphere. This contradictory syntax creates a dreamlike, otherworldly expression reminiscent of the underwater realm—mystical (like the afterlife or the unconscious)—where beauty and sorrow, visibility and opacity merge.

As we have seen, the use of oxymorons in *Othello* and *Desdemona* serves to highlight contradictions concerning love, identity, power, and race.

### Works Cited

- Morrison, Toni. *Desdemona*. Oberon Books, 2012.  
Shakespeare, William. *Othello*. The New Cambridge Shakespeare, edited by Norman Sanders, 1984, Cambridge UP, 2018.

## 研究ノート

### 映画『アプレンティス』—アメリカ大統領ドナルド・トランプの青年期を見る

清水 純子



#### 『アプレンティス　ドナルド・トランプの創り方』

2024年製作／123分／R15+／アメリカ／原題または英題：The Apprentice／配給：キノフィルムズ／劇場公開日：2025年1月17日／<https://www.trump-movie.jp/> DVD販売元 Happinet/

スタッフ：監督アリ・アッバシ/製作アリ・アッバシ 他/ 脚本ガブリエル・シャーマン/撮影キャスパー・タクセン/ 美術 アレクサンドラ・マリンコビッチ/ 衣装ローラ・モンゴメリー/ 編集オリビア・ニーアガート=ホルム オリビエ・ブッゲ・クエット/ 音楽マーティン・ディルコフ

キャスト：ドナルド・トランプ=セバスチャン・スタン/ロイ・コーン=ジェレミー・ストロング/ イヴァナ・トランプ=マリア・バカラーバ/ フレッド・トランプ=マーティン・ドノバン/ マリー・アン・トランプ=キャサリン・マクナリー/ フレディ・トランプ=チャーリー・キャリック/ ラッセル・エルドリッジ=ベン・サリバン/ ロジャー・ストーン=マーク・レンドール/ファット・トニー・サレルノ=ジョー・ピングー/

『アプレンティス　ドナルド・トランプの創り方』は、第45&47代アメリカ大統領ドナルド・ジョン・トランプ (Donald John Trump, 1946年～) の青年期を映画化する。

シャイで繊細な若者ドナルド・特朗普が辣腕弁護士ロイ・コーンの手によって規格外の怪人に育っていく過程を興味深く描く。映画は大統領選のさなか、特朗普が時の人であり、アメリカの最高権力者になる可能性があった中で、その製作と公開は大胆な試みであった。

## 話題を呼ぶ大胆な映画

### ① 封切りの時期

映画『アプレンティス ドナルド・特朗普の創り方』が大胆な映画として話題になるのは、第一にその封切りの時期である。この映画が日本で公開されたのは 2025 年 1 月 17 日なので特朗普が正式に第 47 代アメリカ大統領に決定（2025 年 1 月 6 日）後だが、全米公開日は 10 月 11 日、大統領選真っ只中の出来事だった。当然特朗普は上映阻止を働きかけたという。

### ② ドナルド・特朗普の嫌がる内容とは？

特朗普が嫌がる映画にはどんなことが描かれているのか？と観客の好奇心は逆に掻き立てられる。知られては困ること、嫌なことがたくさん出てくるのか想像する。

鑑賞した結果は、興味深いが、客観的には特別スキャンダラスなことは出てこない。いまさら隠すことも恥ずかしがることもないでしょ？という内容である。あの程度のこととで上映阻止に動くなんて、特朗普さんは意外にシャイで見かけを気にする人なのだとほっとするところもある。日本では「怪物」とか「普通の人ではない」とか色眼鏡で見られがちな特朗普の隠された「普通のところ」を感じる。大統領に決まっていなかった時期だから少しでもマイナスに働くところは見せたくないのはわかるけれど、マスメディアで見る特朗普のやんちゃなイメージからすれば誰ももはや驚かないはずである。

ではどこが特朗普が知られたくなかったことなのか？ まず第一には整形美容手術を受けたことである。特朗普が見栄えを気にかける性分なのは、映画内のしょっちゅうガラス窓に映った自分の髪型を気にする場面が示している。金髪の美青年であった特朗普も年齢を重ねていくにつれて、肥満と頭髪の減少には逆らえなかった。夫婦仲がまずくなりだした時、最初の妻イヴァナに「太め、ハゲ」と罵倒された特朗普は、意を決して整形手術を受ける。手術の場面はかなりリアルで、脂肪吸引術や髪の毛を移植するところなど露骨に映像化している。二番目に嫌だったと想像されるのは、特朗

プの師でもあり創造主といつてもよい師匠ロイ・コーンの存在だろう。

### 師匠ロイ・コーン

ロイ・コーンはユダヤ系のやり手の弁護士であるが、ローゼンバーグ事件やマッカーシズムに関わり、違法行為とモラルのない所業で有名、一言でいえば悪徳弁護士である。コーンは隠れゲイで、最後は囮っていた愛人男性のエイズに感染して亡くなる。コーンが治療薬を求めてあがくさまは、トニー・クシュナー（Tony Kushner,1956~）の有名な舞台劇『エンジェルス・イン・アメリカ』（*Angels in America*, 1991~19994、ピューリツツァー賞およびトニー賞受賞）に詳しく描かれている。

好青年トランプがコーンの歓心を買ったのはまちがいないにしても、トランプはコーンの愛人ではなかったことを映画は証明する——招かれたパーティで知らない間に消えたコーンの姿を探すトランプ青年は、上階でコーンが複数の男娼を相手に裸でプレイに励むさまを扉の隙間から見て肩をすくめて立ち去る。

トランプの不動産業を営む父親の会社は公民権法違反の黒人差別疑惑で倒産寸前、夢見たトランプタワーの資金調達はめどがつかない。新入り美青年を気に入ったコーンは、トイレまで押しかけて弁護を頼むトランプ青年に救いの手を差し伸べ、トランプ家は無罪を勝ち取る。コーンの元に弟子入りしたトランプは、目的を達成するためには手段を選ばない強引なやり方を学ぶ。コーンなくしてトランプの成功はおぼつかなかったと言える。トランプはコーンの秘蔵っ子であり、コーンが創り出したキャラクターであると言って過言でないと映画は思わせる。

度を超えた違法行為とエイズ感染によって地位も健康も失って死路を急ぐコーンとは対照的に輝かしい未来を手にしたトランプは、最後には華やかに冷たくコーンと手を切る。以後トランプは、コーンの弟子だったということを隠したがった。それでもトランプの政治上のイスラエルびいき、プライベートでも長女イヴァンカがユダヤ系の青年と結婚してユダヤ教に改宗したことからすると、トランプはコーン師匠のことを心の底ではいまだに大切に思っているのかもしれない。

### あざといタイトル『アプレンティス』の由来

映画のタイトル『アプレンティス』は、あざとい命名である。映画ポスターが示すように玉座に座る若者トランプの後ろには、暗い不健康な顔をしたやり手のロイ・コーン

がトランプの肩に手をかけて立つ、まるでトランプの生靈のようにトランプを守り支え、そして掌握するかのように存在する。この構図が示すようにこの映画は、トランプと師匠ロイ・コーンの関係を描いたものである。主役はもちろんトランプだが、トランプ一人ではなく、ロイ・コーンももう一人の影の主役である。トランプを支配するのは亡靈の師匠コーンだと言わんばかりである。トランプは師匠ロイ・コーンの影響から逃れることはできないと言うのか？ Apprentice は、「徒弟、年季奉公人、見習生」の意味である。映画の題名『アプレンティス』は、文字通りトランプがコーンの徒弟であったことを示す。トランプはコーンから「ロイ・コーンの勝つための3原則」を叩きこまれる—「攻撃、攻撃、攻撃」②「決して非を認めるな」③「勝利を主張し続けろ」。トランプは、大統領選でバイデンに敗れた時も負けを認めず、闘い続け、大統領に返り咲き、勝利を手中にしているので、コーン師匠の3原則に従って成功したと言える。

『アプレンティス』は、徒弟という意味だけではなく、トランプが出演していたテレビ番組『アプレンティス（The Apprentice）』（2004年）にもひっかけている。その意味で『アプレンティス』は、ダブル・ミーニングである。NBCテレビのリアリティ番組『アプレンティス』にホスト兼プロデューサーとして参加した不動産王トランプは、見習いの若者に課題を与え、期待に答えられなかった者に「You're fired!」（お前はクビだ！）と宣告する。この言葉は流行語になり、トランプの存在を全米に知らしめることになる。

### 今頃になって話題の『アプレンティス』

『アプレンティス』は、日本では2025年1月に封切られたが、大きな映画館ではなく小規模で数少ない映画館でひっそりと公開された。筆者は封切り時に駆けつけたが、なぜもっと大きな映画館で上映しないのか、宣伝ももっと大規模にしないのか？と思った。日本にとって大切なアメリカの新大統領が上映を快く思わない映画なので遠慮したのではないか？と憶測した。

しかし客観的で中立的、なおかつ観客の好奇心を満足させ、トランプという人物の青年期の成長を過不足なく描くアリ・アッバシ監督や脚本家、製作陣の力量に感激した。政治的偏りや偏見、嫌悪、その反対の熱狂的支持や持ち上げもなく、淡々と公平に渦中の人物を描き、なおかつエンターテイメント性を失わない映画創りは賞賛に値する。

映画の成功を支えた大きな力は、トランプ青年を演じたセバスチャン・スタンの名演

技だろう。誰もが知っていて、TVに登場しない日はない世界一有名な人物をあの難しい時期に演じるのは勇気がいる。しかし、スタンは臆することなく若き日のトランプを見事に演じきった。ちょっとしたしぐさやたたずまいもトランプそっくり、それでいて技巧的でなく自然に、大きな夢を持ってはばたこうとする若者を好演する。ハンサムな好青年トランプを演じたセバスチャン・スタンの演技には、本物のトランプ大統領も文句は言えない、いや言うべきではない。ローマ法王に扮した自分の合成写真をおもしろがっていたトランプ大統領は、自分が素敵にコピーされたことに苦情は言えない。

## ドナルド・トランプを支えるもの

日本人の中には、トランプのような極端な政策を掲げて世界経済を翻弄する人物がなぜ大統領に選ばれたのか？と疑問を感じる人がいるかもしれない。しかしこの映画はアメリカという国がトランプのような柔軟な、ある意味で主義主張よりもポピュリズム（大衆迎合主義）を優先する大統領を必要としていたことを暗示する。アメリカは、勝者に多くが与えられ、敗者にはみじめな生活しかない国である。アメリカは弱気な者、負け犬に居場所を与えてくれる国ではない。アメリカ人にとって国は守ってくれない、自分のことは自力で個人で解決し防衛して這い上がらなければならない（映画でもトランプの兄であるトランプ家の長男のアルコール中毒による早世を語る）。このアメリカに努力と気概によって弱気を克服して変身を遂げたトランプが敗者の不満と不安を代弁すべく出現した。監督アッバシはアメリカ人ではないので、この点をより冷静に公平に見つめられる。

トランプ自身はエリートの生まれであるが、這いずり回って栄光をつかんだアメリカン・ドリームの体現者でもある。困難にあっても負けず、倒れても立ち直り、成功する。その象徴的事例が選挙演説中に起こった。トランプ暗殺未遂事件である。2024年7月13日に、トランプはペンシルベニア州バトラー近郊での選挙集会中に銃撃されて右耳に軽傷を負いながらも「Fight（戦え）！」と繰り返し叫んだ。筆者はこの映像を見た瞬間、アメリカ大統領はこの人に決まった！と直感した。事実支持者の間では、「神に選ばれた人」としてトランプの神格化が始まったという。困難に立ち向かい、勝利する男のイメージがトランプの上に舞い降りたのである。

前例のない奇抜な作戦で世界を煙に巻くトランプ政権であるが、二つの戦争の和平調停に余念がない。まだ完全な解決には至らないが、初志貫徹！頑張ってくれ！トラン

プ！と『アプレンティス』を見た者は思ってしまう。この映画はトランプ応援でも礼賛でもないにもかかわらず、前進へのエネルギーを与えてくれる。トランプ育成にコーンは大きく関わったが、トランプ自身もそうとうな努力家で、そのうえ人の心をつかみ、チャンスを逃さない天賦の才に恵まれていた。男性の有力者だけでなく、次々と美女を妻にしてトランプ・ファミリーを形成したのもその才能の一例である。

日本との商取引が映画に出てくるが、事実トランプに借金を踏み倒され、その後始末に苦しめられた話を筆者は元同僚から聞いている。それゆえわが古巣ではトランプの話題は御法度である。『アプレンティス ドナルド・トランプの創り方』は、プラス・マイナス両面を備えた人間臭いトランプを見つめたすばらしい映画である。

©2025 J. Shimizu. All Rights Reserved. 1 Sept. 2025

コーンの後ろ盾で成功するトランプ





最初の妻イヴァナとトランプ



自信満々の若きトランプ

(C)2024 APPRENTICE PRODUCTIONS ONTARIO INC. / PROFILE PRODUCTIONS 2 APS / TAILORED FILMS LTD. All Rights Reserved.



### 掲示板

#### I. <『英語文化エッセイ』投稿規定>

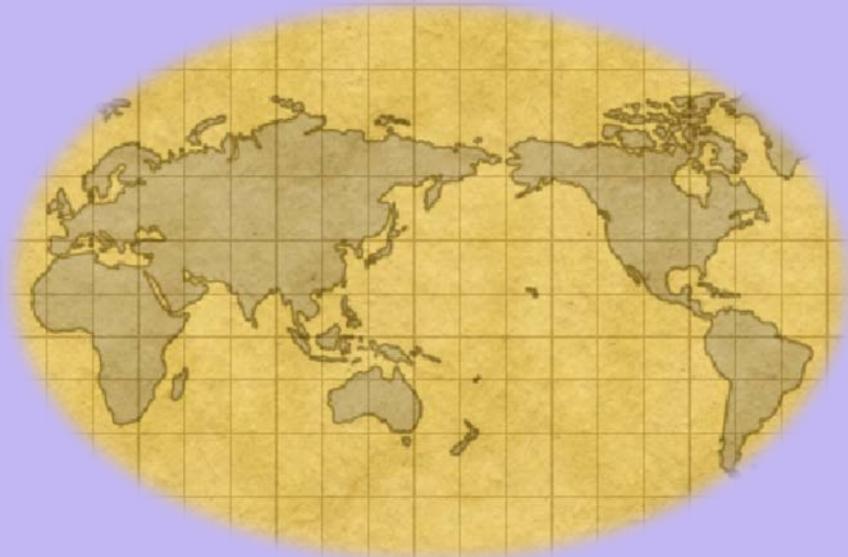
- I. 日本英語文化学会『英語文化エッセイ』は文学、文化、言語学、英語教育の各専門分野から幅広く投稿を求めています。〈研究ノート〉、〈書評〉、〈その他〉和文2,000字、欧文800語程度/応募締切：2026年10月31日  
応募先：日本英語文化学会会報編集部編集長 清水純子 〒181-0005 東京都三鷹市中原2-25-25 / tel: 0422-41-0029 / e-mail: [jesse@jcom.zaq.ne.jp](mailto:jesse@jcom.zaq.ne.jp)

応募方法：メール（Word 形式の添付ファイル、テキスト形式の添付ファイル）  
掲載の採否については編集部にご一任願います。  
投稿原稿の用紙サイズ設定、行数文字数などページ設定に関しましては A4 用紙  
Word 標準設定でお願いいたします。「メモ帳」等でテキストファイルに変換した  
原稿も添付してください。  
コラム等のレイアウトおよびフォントやデザイン等は編集部にご一任ください。  
[＜http://nihoneigobunka.jellybean.jp/＞](http://nihoneigobunka.jellybean.jp/)

## II. 『異文化の諸相』投稿募集のお知らせ

2027 年 2 月発行予定の『異文化の諸相』第 47 号 の原稿提出締切日は 2026 年 10 月  
4 日です。投稿を希望される方は学会ホームページの『異文化の諸相』投稿規定をよ  
くお読みください。

原稿提出先：日本英語文化学会学会誌編集委員長 jsce.submission@gmail.com



『英語文化エッセイ』は学会ホームページに掲載されます。デジタルファイル /PDF  
等は、アップデートができます。見落としや訂正がございましたらご連絡ください。  
＜編集部付記＞

## 編集後記

### 『英語文化エッセイ』 編集長 清水 純子

2025年8月29日（金）日本英語文化学会大会は無事終了しました。今年は「宇都宮大学 峰キャンパス」を初めての開催校にいただきました。都心からはやや遠いですが街中にあっても閑静でりっぱなたたずまいはおおいなる風格でした。

2025年は、トランプ氏がアメリカ大統領に再選されて、世界は激動の時代に突入し、揺さぶりをかけられています。「米国第一主義」を掲げるトランプ大統領は、各国に法外な関税をかけ、不法移民を制限してアメリカ国内での生産によって「アメリカを再び、偉大な国へ」というスローガンの実現を目指します。世界各国のひんしゅくを買ってもトランプ流統治は進められます。映画で見る通りトランプ氏の若い頃からの信条の実践です。トランプ大統領は、ウクライナ紛争、ガザ戦争の停止を求めます。ロシアのプーチン大統領とは頻繁に交渉しています。トランプ大統領は「プーチンは会うと感じいいが、いいかげんで信用できない、それにたくさん人を殺している」と言いました。なんとわかりやすく本質を突いた言い方でしょうか。トランプ氏には鳥観図的な視点が備わっていると思います。現時点では必ずしも政策がうまく機能しているとはいえないでの、その才能をいかす方法を考えるべきです。ともかく戦争によって利益を得ようとする一部の人々を除いて、平和の到来は世界中の人々が望んでいることです。気が遠くなるほど困難な試みですが、トランプ大統領は目標に向かって邁進中です。任期中に平和が達成されることを望んでやみません。

日本国内では10月21日、高市内閣が発足しました。第104代首相に指名された高市早苗氏は、日本初の女性内閣総理大臣です。10月4日の自由民主党内総裁選挙で高市氏は自民党新総裁に選出されましたが、長年連立政権を組んできた公明党が離脱したため、政局は不安定になりました。しかし日本維新の会との連立政権樹立によって、難局を乗り切りました。10月27日に来日したトランプ大統領との会談は和気あいあいのうちに成功したと伝えられました。今後の彼女の活躍と日本の更なる発展、および世界の平和と秩序回復を祈りましょう。

クマの人間の生活圏への異常なまでの出没、クマ被害が心配でもあります。

編集: 日本英語文化学会 / 編集部: 清水純子 松山博樹 /2025 年 11 月 20 日発行

# 日本英語文化学会

© 2025 The Japanese Association for English Studies